

声を聞いてみたい人がいる。  
憧れと共感が、  
明日のフロンティアを  
誕生させる。

# frontier

フロンティア

応援はいくらでもします  
一生の仕事として続けてください

社会医療法人ジャパンメディカルアライアンス  
東埼玉総合病院 副院長／看護部長

吉倉 充子

単位人口あたりの  
医師数・看護師数が  
ワースト1になった埼玉県

——貴院は日本看護協会と埼玉県看護協会の看護職雇用促進事業の実践病院としても知られ、個人のライフスタイルを尊重した採用制度や就業スタイルなど様々な工夫をされていますが、吉倉さんが入職されてからはどれくらいにな



りますか。

**吉倉** もう32、33年になります。学校を卒業してから、10年ほど東京厚生年金病院に勤めていましたが、結婚してこちらに引っ越してきたのをきっかけに入職しました。当時は総合病院ではなく、救急車がひっきりなしに入ってくる野戦病院みたいで、それまでの病院とはかなり違うという印象を持ちま

した。

——ご自身としては、当時どのような働き方をしようと思われていたのですか？

**吉倉** 子供も2人いましたので、最初はパートで入ろうと思っていました。しかし、看護師が不足していたようで、私の事情をかなり汲んでくださったうえで常勤にと言われたので、常勤として入職しました。夜勤も、土日だけです、やらせていただきました。

こちらに来てから3人目も生まれました。当院に来なければ3人目は産まなかったと思うので、ちよつと得しちゃったかなと思っています(笑)。

——そうすると、貴院では以前から、看護師の方の働きやすい環境を提供されていたのでしょうか。

**吉倉** そうですね、人がいないから、人に合わせた雇用スタイルをとっていた



のでしよう。今では更に、個人のライフスタイルに合わせたものになっています。

——人がいないというのは、やはり一番の課題でしょうか。

**吉倉** そうですね。でも楽しいんですよ。人がいない状況をどうやって巧く組んでいこうかというのは、今はもうずいぶん人が来てくれるようになりましたので、このころはむしろ贅沢を言うようになってきましたが(笑)。

——看護師がなかなか集まらないというのは、地域的な特性でしょうか。

**吉倉** 特性です。埼玉県は日本でも有名なんですよ。人口10万人あたりの医師数、看護師数が共に全国ワースト1だと。特に、この地域がまた少ないのです。東京までが通勤圏なので、私の家族もそうですが、みな東京に行ってしまうんですね。

——そうしたなか、どのように看護師を集めてこられたのですか？

**吉倉** まず個人のライフスタイルを尊重するということで、勤務は何時間でも構いません、3時間から採用します、ということにして、非常勤で大勢入っていたできました。

その非常勤の人たちは、子供がだんだん大きくなって手離れすると、常勤になつてくれるのです。その後、ふたたび子供に手がかるようになって、非常勤に戻りたいという人もいます

が、総じて非常勤から常勤になる人のほうが多いように思います。

非常勤から常勤になるということ、病院のことをよく分かっているからこそ常勤になってくれるわけで、それもまた病院にとって大きな宣伝効果になります。

同時に、子育て支援にも力を注いできました。子供を持つっていると、どうしても夜勤は難しい。そこで、当院では「夜勤専従」の看護師にもかなり入っていただいているのです。

今では独身が少なくなっているくらいです。科長(師長)クラスで産休に入っている者もいます。

### 配属は希望を優先 新人支援担当看護師など 教育は病院全体で

——教育については、入職後に2ヶ月間、各科をローテーションされるそうですが、これはなかなか珍しいのではないのでしょうか。

**吉倉** 入職後のローテーションは4、5年前から始めました。各病棟を回って、そのうえで私が面接して配属を決めるようにしています。行きたいところは自分で決める。こちらから与えるのではなく、何事も本人の希望を優先していきたくと考えています。もちろん、当院が小さな病院だから、そうしたこともできるのです。

——最近、なにかと自分で決められない人も増えていると聞きますが

**吉倉** 入職時に各科をローテーションで回るとは、本人の希望を聞くためだけでなく、なにかと負担の大きいプリセプターを支える意味もあり、プリセプターでは行き届かないところをサポートをしようという、新入職者を病院全体で支える仕組みでもあります。

また、時を同じくして、新人支援担当看護師による「わかば教室」も始めました。当院は新人が10人前後ですから、Face to Faceで付き合えます。勤務の帰りに立ち寄って、その日できなかつたことを、みんなでもう一度、練習したりするので。しかし、帰りに毎日寄らなければならぬということ自体がプレッシャーになり、むしろ、昼休みにご飯を食べながら相談に乗ってあげたほうがいいようなので、最近は毎日ではなく、日を決めて行っています。今の若い人たちは、ともすると、できないのは自分が悪いからだと自分のせいにしてしまう人が多い。そこは手を差し伸べて、フォローしたいと思っています。

私自身も、このころは回数が少し減りましたが、1日何度か院内をラウンドし、会う人には必ず声を掛けることをモットーにしています。そうすると、小さな変化にも気づくことができるのです。これも、小さな病院ならではの

よしくら・みつこ

1969年……東京厚生年金病院付属高等看護学院卒業  
東京厚生年金病院入職  
1979年……東埼玉総合病院入職  
2001年……東埼玉総合病院看護部長  
2006年……東埼玉総合病院副院長・看護部長

ことですね。

**個性に合わせた  
多様な勤務形態を整える  
小さな病院ならではの強み**

——看護部長からご覧になって、貴院看護部の良いところはどこでしょう？

**吉倉** 素直で、前向きなところ。そして、ワーク・ライフ・バランスを上手くとって、長く勤める元気な看護師が多いところですね。

当院では、休暇の希望はほぼ100%受け入れるようにしています。自分に余裕がないと、仕事が流れ作業になって、良いケアはできませんので。

——オンとオフ、仕事でも生活でも自立していくことが必要ですね。

**吉倉** 私は一日中オンの人がいて面白いと思うんです。ずっとオンでも、それはその人のワーク・ライフ・バランスなのです。人間は一人ひとりスタイルが違って、いっぱい休んで初めていい仕事ができる人もいれば、休まずにずっと働いていたいという人もいます。趣味と実益を兼ねて働き続けてもらうのは大いに結構。ただし、健康にだけは気をつけてください、と言っています。

ともあれ、個性を大切にすることで、他人の真似をしない。自分は自分で、これでいいんだという自信を持つ

て、ライフスタイルを決めて欲しいと思います。

**自立の次は自発性  
新しい病院のコンセプトは  
ボトムアップを重視**

——看護部長になられたときに、「これはやる」という目標を立てられましたか？

**吉倉** やはり看護師の自立ですね。それは私自身が当院に「看護師として入職したときから変わりません。

具体的には、「根拠のあるケア」を。つまり、個々の患者さんの必要性に沿った、個性のあるケアを提供することです。根拠がわかっているならばミスも少なくなるでしょうし、患者さんとの信頼関係を築くこともできます。看護師は経験値が豊かであるほどいいケアができるようになりますので、そのためにもきちんと基礎を固めて、その上に積んでいくことが必要です。

また、組織としては、2012年に新しい病院に移転するのを機に、これまでのように私が主導して上位下達でやるのではなく、みんなが参加して自分たちの新しい病院を創ってほしいと思っています。私は30年ずっと独断と偏見で進んできましたので(笑)、これからはみんなの意見を聞いてやっていくつもりです。

私の仕事はまず第一に、スタッフに

いい環境を提供して、余裕をもって患者さんの看護にあたってもらえるようにすることです。

——2006年には副院長になられたましたが、副院長のお立場としては、どのような課題を感じていらっしゃいますか。

**吉倉** なかなか難しいですね。私自身としては、看護部長としてではなく、副院長として発言するように心がけているのですが、傍からは、結局看護部長としての発言でしょう、と言われることもあります。自分ではそんなつもりはないのですが、まだ考えが足りないのかなという反省も多々あります。

また、看護部はどうしても人数が多いので、ある一方に向かったりすると、意図せずとも強い力を発揮してしまいがちです。数は多くても、個々人が一つひとつ、他の考えも許容できるようになっていかないと、チーム医療はできないでしょう。

しかし、当院ではこれまで、科長(師長)たちは看護師としての根拠と知識を持った上で発言してきて、医師たちもそれなりに信頼してくれていますので、これからはますますいい形で発展していけると感じています。

——現在、各領域の認定資格をとって活躍されている看護師の方が増えてきていますが、「根拠のあるケア」をモットーに取り組みされてきた貴院でも、専



門領域の資格をとる方が増えていらっしゃるのでしょうか。

**吉倉** 感染と皮膚・排泄ケア、そして現在、糖尿病の認定コースを受講している職員が2名在籍しています。私も、これからはとにかく自立のためにも認定看護師を目指したほうがいいと話しています。

当院では、認定看護師は専従にしています。もし自分が認定看護師になったら帰ってきたときに、専従ではなく兼任だったら、まったく不満がないとはいえないですよ。それだけのプライドを持って学んできているのですから。また、いい環境を提供すれば、他の人も認定を取りに行きたいということにもなります。私はできる限りのことをしてあげたいと思っています。

## ワースト1を跳ね返す 関東近県から患者を集め 地域にも出かけていく

——新しい病院は、どのような形になるのですか？

**吉倉** 当院は糖尿病を中心に、心臓カテーテルやがんの手術、そして関東近県から患者さんが集まる埼玉脊椎脊髄病センターも有しています。

新しい病院では、ゆくゆくは新たなセンターも立ち上げたいと計画しています。ベッド数は1病棟35床の5病棟となり、患者さんにも看護師にも優しい環境の提供を考えています。さらに、個室を多くし、4人床と個室が中心になっています。個室を多くして欲しいという希望が多いので。

そうなると当然、標榜科以外の科でも入院される患者さんが出てくるかもしれない。ですから、新しい病院に向けて、ある程度入院はこの科でも受けられるようにしようと、「院内留学」として、主任、中堅が1ヶ月ずつ、いろんな病棟で研修を受け始めています。

私たちぐらいの小さな規模の病院では、何科、何科というセクト意識を持つてしまうと、うまくいきません。入院する患者さんはどこでも看られますよ、という感じにしていきたいと思っています。あくまで標榜科に優先的に入りますが、そこに入れない場合は、

うちの科でもいいですよ、と手を挙げられるようにしたい。看護部は一つでやっていきたいと思っています。

——ここは、私の出身である秩父市に次いで高齢化率が高い地域です。当院は訪問看護ステーションを持っていますが、院内だけで患者さんをお待ちするのではなく、病院としてもっと外へどんどん出ていきたい。これまでは病院完結型でしたが、これからは地域も含めて、医師、保健師と協力していききたいと考えています。

また、新病院は現在の杉戸町から幸手市に移りますので、新しい地域の医師や住民の方々と連携し、新しい土地で「おらが病院」として、やっていきたいと思っています。

——最後に、これから看護師を目指している人たちにメッセージを一言お願いします。

**吉倉** 看護師は、やり続けることに意味があると思います。たくさん経験を積み、また患者さんに育てていただきながら、人間としても成長していきます。ぜひ、辞めないで一生の仕事として続けていただきたい。

そのために、当院も個人のワーク・ライフ・バランスに合わせた多様な勤務形態を整えてきました。応援はいくらでもします。私もずいぶん応援してもらったので、そのお返しをしないといけないと思っています。